

# SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

## ブラックバード 家族が家族であるうちに

2019年/アメリカ・イギリス合作映画  
配給：プレシディオ、彩プロ/97分

2021 (令和3) 年6月12日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

Data

監督：ロジャー・ミッシェル

脚本：クリスチャン・トーブ

原案：デンマーク映画『サイレン  
ト・ハート』

出演：スーザン・サランドン/ケイ  
ト・ウィンスレット/ミア・  
ワシコウスカ/リンゼイ・ダ  
ンカン/サム・ニール/レイ  
ン・ウィルソン/ベックス・  
テイラー=クラウス/アン  
ソン・ブーン

## 👁️👁️ みどころ

母親役のスーザン・サランドンと長女役のケイト・ウィンスレットという2人のアカデミー賞女優が激突！更に、そこに次女役としてミア・ワシコウスカも参加し、総勢8名が織り成す“最後の晚餐”はみどころいっぱい！

吉永小百合122作目の最新作『いのちの停車場』（21年）では消化不良だった「安楽死」のテーマが、本作では真正面から観客に問われてくる。

どんなケースなら安楽死はオーケー？なぜ自殺ほう助を恐れなければならないの？イエス・キリストの「最後の晚餐」と対比しながら、本作の“最後の晚餐”のあり方をじっくり考えたい。また、そんな論点を明示した邦画の登場を待ちたいが、コロナ騒動でもわかるとおり、何事もすべて曖昧になってしまう今の日本では、それは無理・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■安楽死を真正面から！冒頭に見る母親の決意は？■□■

日本では、「安楽死」には①患者が耐え難い肉体的苦痛に苦しんでいる、②死が避けられず、死期が迫っている、③肉体的苦痛を除去・緩和するために方法を尽くし、ほかに代替手段がない、④生命の短縮を承諾する患者の明示の意思表示がある。この4つの要件が必要。この4つを満たさないまま、医師が患者の安楽死に協力すれば、殺人ほう助罪になってしまう。しかし、米国ではオレゴン州やワシントン州などいくつかの州では、医師による自殺介助が合法化されているそう。それについては、パンフレットにある、松田純（静岡大学名誉教授）のエッセイ「人間は『自由にして依存的な存在』」を参照。

日本では目下、吉永小百合122作目の出演作『いのちの停車場』（21年）が大宣伝されているが、同作ラストの安楽死を巡るストーリーはハッキリ言って“逃げ”。私にはそうとしか思えなかった。それに対して、ハリウッド映画には『海を飛ぶ夢』（04年）（『シネ

マ7』197頁)等、安楽死と真正面から向き合った名作がたくさんある。アカデミー主演女優のスーザン・サランドンとケイト・ウィンスレットが共演した本作も、まさにそれだ。

本作導入部では、夫のポール(サム・ニール)と妻・リリー(スーザン・サランドン)が暮らす瀟洒な(と言うより、超豪華な)海辺の家に次々と家族が集まってくるが、それは一体何のため?娘たちの訪問を待ち受ける夫婦の語らいによれば、はっきりリリーの口から安楽死の決意が述べられ、医師である夫のポールがそれを承諾し、協力する構想が明確に示されるので、それに注目!さあ、現実になんかことがあれば、警察は?

### ■□■しっかり者の長女は賛成だが、できの悪い(?)次女は?□■

同じ日に観た内田伸輝監督の『女たち』(21年)では、右半身が麻痺した高畑淳子演じる母親・美津子と、そんな母親の介護をしながら母親からバカにされ続けているアラフォーの独身娘、篠原ゆき子演じる美咲との葛藤が生々しく描かれていた。しかし、末期のALS(筋萎縮性側索硬化症)患者だという本作のリリーは、左半身の麻痺が少し出ている程度で、『女たち』の美津子よりはずっと軽度。しかし、近いうちにその症状は深刻化するため、「管やパイプに繋がれて人工呼吸や人工栄養補給されるのは真っ平ごめん!」と拒否するリリーは、自分自身で入念に考え、夫とも十分に打ち合わせをしたうえで、安楽死の実行計画を練り上げ、今それを決行しようとしているらしい。

夫のマイケル(レイン・ウィルソン)と一人息子のジョナサン(アンソン・ブーン)とともに両親の家に入った長女のジェニファー(ケイト・ウィンスレット)は、リリーからその計画を聞かされると、それに同意。なんともトンチンカンな発言を繰り返す夫にイラつき、はじめてそんな事態を聞いて驚く息子に配慮しながら、何とか母親の決断を尊重しようと前向きになっていく。さすがにしっかり者の長女だ。

他方、遅れてやってきた次女・アナ(ミア・ワシコウスカ)は、同じ話を聞いても姉とは受け取め方が全く違うらしい。また、ジェニファーが連れてきたのは夫と長男だが、アナが連れてきたのは、別れたりくっついたりを繰り返している男・クリス(バックス・テイラー=クラウス)。たまたま今はくっついているから一緒だが、最後の時間を家族とともに過ごすためにリリーが設定したこの週末に、こんな男が参加していいの?また、しっかり者の長女のジェニファーと違って、妹のアナは数か月も連絡が取れなかったそうだから、何かと問題を抱えているらしい。しかし、今この場でそのことを姉妹間で議論し、喧嘩になっちはナンセンスだから、とりあえずその論争は棚上げ!この家ではとにかく母親の意思に逆らわないようにとジェニファーは釘を刺し、アナもそれに同意したが・・・。

### ■□■登場人物は8名のみ。舞台劇の面白さと緊張感が満載!■□■

イエス・キリストの「最後の晩餐」の参加者は裏切り者・ユダを含めて13人だったが、リリーが望んだ家族だけの「最後の晩餐」は、以上の7名のはず。ところが、なぜか家族だけの最後の集まりの中に、リリーの親友のリズ(リンゼイ・ダンカン)が当然のように

参加していた。もともとあまり事態が把握できていない妹のアナはともかく、何事にも敏感でしっかり者の長女のジェニファーは、そのことに当然違和感を持っていたが、それを言い出すわけにいかないことは、空気を読めば当然。それを含めて、一同が揃ったところでリリーがやんわりと切り出した安楽死の計画にジェニファーが反論できなかったのは仕方ない。

そして、事態はリリーの思うまま、今夜は臨時のクリスマスパーティー開催となったから、男たちはもみの木の伐採に、女たちには料理の準備や装飾の準備の役割が。その間、リリーは参加者みんなに最後のクリスマスプレゼントを準備するらしい。イエス・キリストの「最後の晚餐」はイエスとユダだけが最後の晚餐であることを知っていたが、これからスクリーン上で展開される臨時のクリスマスを祝う“最後の晚餐”は、文字通りの“最後の晚餐”であることを全員が知っているものだ。そんな中で、イエス・キリストは1人1人にパンと葡萄酒を分け与えたが、スクリーン上の“最後の晚餐”では、リリーが参加者みんなに分け与えるクリスマスプレゼントの豪華さとその意味に注目！参加者8名の舞台劇は、そんな面白さが際立っていくことに。

## ■□■母 vs 娘対決が名演なら、長女 vs 次女対決も名演！■□■

本作のメインの売りは、スーザン・サランドン vs ケイト・ウィンスレットというアカデミー主演女優賞女優同士の共演だが、同時に長女 vs 次女の共演も素晴らしい。『ジェーン・エア』（11年）（『シネマ28』224頁）、『欲望のバージニア』（12年）（『シネマ31』214頁）、『嗤う分身』（13年）（『シネマ35』未掲載）、『ナチス第三の男』（17年）（『シネマ43』210頁）等でもいい味を出していた個性派女優、ミア・ワシコウスカは、リリーの判断に当初は渋々従いながら、“最後の晚餐”のハイライトで遂にその心情を爆発させてしまう、出来の悪い(?)次女・アナ役をセンシティブに演じている。

“最後の晚餐”で次々と配られるクリスマスプレゼントの“授与式”はそれぞれ感動的に終わった。また、みんなで揃って歌った懐かしい時代の歌もスムーズに終わった。しかし、そこで最後の言葉としてリリーが述べた家族への感謝の言葉の中で、「私は娘を強くあれ、自由であれ、と育てた」と語ったのは失敗だったらしい。リリーは心からそう考えていたし、ジェニファーはそんな母親の思い通りに成長したのだろうが、妹のアナは？季節外れの中で企画されたクリスマスパーティーと“最後の晚餐”は、何の脚本もないままそこまで順調に進んでいたのに、それに反発したアナの言動によって、すべてがぶち壊しに。「私は強く自由な女なんかじゃない!」、「その逆で、薬物に依存する人生の敗北者だ!」と叫ぶだけ叫んで席を立ってしまったアナに、残された7名は啞然。誰もが言葉を失う中、リリーの「疲れたから休むわ」の声だけが小さく……。

## ■□■その夜、長女が目撃したものは？ええ、まさか？■□■

その夜の不可欠となった長女・ジェニファーの仕事は、アナの説得。自分への反省も含めて、ジェニファーがアナとどう向き合うのかがその夜の1つの焦点だ。ちなみに、本作

はもともとビレ・アウグスト監督によるデンマーク映画『サイレント・ハート』（14年）をその脚本家であるクリスチャン・トープ自身がアメリカでの映画化に向けて脚色したものを『ノッティングヒルの恋人』（99年）や『ウィークエンドはパリで』（13年）等のロジャー・ミッシェル監督が演出したものだ。そのため、脚本がよく練られているのは当然だ。自分の娘を2人とも、強くかつ自由に育て上げたとの認識が間違っていたことを、安楽死決行日の直前にはじめて知ったリリーはその後アナとの語らいの場を持ったが、その中で気持ちの整理は如何に？他方、アナの方ははじめて自分の心の中で鬱積してきたものを直接母親にぶちまけたことによって、心の解放がやってくるの？そんな点に注目したい。

しっかり者の長女・ジェニファーは妹・アナの想定外の、しかも半分錯乱じみた反乱にビックリさせられたものの、自分とリリーがそうであるように、アナとリリーも娘と母親だから、腹を割って話をすれば何とかなるもの。夜中にいろいろやっているうちに、ジェニファーはやっとそんな気持ちに整理できていたが、そのときジェニファーが目撃したのは、ポールとリズが抱きあい、キスをしている姿。こりゃ一体ナニ？リズはリリーの昔からの友人で、家族同然の存在だったが、あの抱き合い方は？あのキスの仕方は？まさか、いや、でも・・・。

本作は冒頭から「安楽死」を真正面から見据えた問題提起作だと思っていたが、ひょっとしてここからは、アシュレイ・ジャッドが素晴らしい演技の中で“二重処罰の禁止”の法理を描いた『ダブル・ジョパディー』（99年）（『シネマ1』38頁）のようなスリラーになっていくの？長年連れ添った妻を信じ、その意向を最大限尊重しているように見える父親・ポールは、ひょっとして長年の愛人・リズとつるんでリリーの殺害を狙っている・・・？

## ■□■一夜明けると事態は？真相は？安楽死の決行は？■□■

本作の脚本は、その夜の出来事として、そんなちょっとしたサブストーリー（？）が描かれるので、それはしっかりあなた自身の目でお楽しみいただきたい。しかして、一夜明けての本筋は局面が一転し、ジェニファーはリリーの安楽死に断固反対の立場に転じてしまうから、さあお立合い！「私は警察に通報する」とまで言い出したから、さあ大変だ。リリーにも、ポールにもサッパリ訳が分からないのは、なぜジェニファーが一夜で意見を180度転換させたのか、ということ。「お父さんは分かっているでしょう」と言われたポールも困惑するばかりだが、そこで分かったような分からないような“論点”を明示して回答したのは、なんとリズ。リズはジェニファーに対して、また、その場の全員に対して「あなたが言いたいのは私とポールが不倫していることでしょ」と明示したからエライ。

そうなると、当然リズの結論は「それはあなたの誤解です」というものだと思っていると、答えは何と正反対。なるほど、それなら、やはりひょっとして・・・？そして、それを更に引き取り、整理したのはリリー本人だ。さあ、リリーとリズはどんな親友なの？そ

して、リズとポールの不倫関係はいつから続いているの？ちなみに、私は『マンディンゴ』（75年）で、主人公が白人の新妻とともに黒人の愛人を故郷に連れて帰るストーリーを評論する中、山崎豊子の『華麗なる一族』で描かれた“妻妾同衾”の物語を引用したが、本作でもどうもそれと似たような物語があったらしい。

道徳的に考えればそれはよくないことだが、文部省推薦映画なら、「それは如何なもの？」というコメントがつくだろうが、クリスチャン・トープが練りに練って書いた脚本なら、それもあり！そんなことを考えながら、本作の結末は、あなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年6月16日記